連載⑰

内海善雄（ITU元事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

グレタさんにぜひノーベル賞を

台風十五号による被害、特に千葉の長く続いた停電が大きく報道された。注目されなかったが、神奈川県でも大きな被害があった。さらに、超大型台風十九号の襲来により、いたるところで河川が氾濫し、多くの人命が犠牲になる甚大な被害があった。昨今は、気象に関して「五十年に一度」、「観測史上初めて」などの稀にしか使われないはずの言葉が、日常茶飯事となっている。

甚大な台風被害の根本原因

千葉の停電被害に関して、「初動動作が悪かった、国、県、市町村の連携がない、東電のでたらめな復旧予想で混乱した」など、多くの批判がある。確かに、非常用の発電機も倉庫に眠って活用されなかったなど言語道断の事象もあり、今後の教訓として検証が重要だ。しかし、もっと大切なものがあると思う。

それは、これほどの被害が出る根本原因をしっかりと認識することである。メディアは、単純に氾濫や家屋の倒壊、犠牲者や停電、断水などの被害の状況と対策が不十分だったと責めるものばかりを報道し、この根本原因についてはあまり語らない。自ずと一般人の意識は高まらず、これでは解決の道が開けないと思う。

しかし、解説などなくとも、なぜ近年自然災害が頻発し、被害が甚大化するのか、その理由は誰でも分かっている。CO_2の増加による地球の急速な温暖化による異常気象である。

東日本震災の原発事故以降、CO_2抑制論議は影を潜め、もっぱら原発反対が世を圧倒し、電力会社は石炭火力に依存せざるを得なくなっている。原発稼働を批判しても、火力発電所の稼働には誰も反対しない。そればかりか、「原発がなくてもやっていけるではないか」と、原発不要論の根拠にまでなっている。

現在、世界で石炭を一番燃やしている日本、そして東京湾沿岸には、大井、品川、千葉、姉ケ崎、袖ケ浦、君津、富津など火力発電所が密集している。さらに、新しい発電所の建設計画も、横須賀、蘇我、袖ケ浦など複数ある。今回の度重なる自然災害は、神が我々に警告を発しているようにも思えるのである。

火力発電が地球温暖化の主要原因のように聞こえるが、電力を消費しているのは産業や個人であり、運輸・交通部門もCO_2を大量に排出する。また、植物さえも分解されるとCO_2を排出するので、大量の樹木を維持・拡大しなければCO_2削減には結びつかない。地球という大きなシステムの中で、全員が、低エネルギー消費や自然保護に努力しなければ温室効果ガスの増加は抑えられないのである。

責任感を感じづらい環境問題

パリ協定は、二十一世紀後半に、温室効果ガス排出量と森林などによる吸収量のバランスをとることを目標としている。たとえパリ協定の約束が実現できたとしても、二十一世紀後半まで、地球の温暖化はますます進むのである。

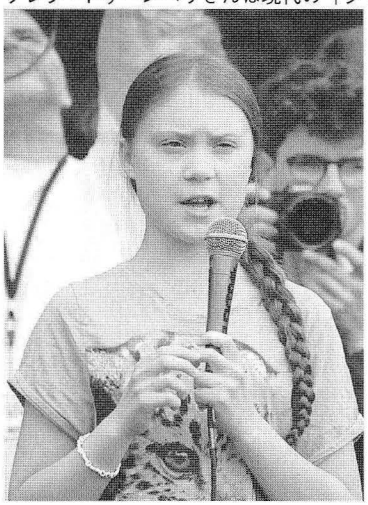
そして、約束実現は、今のところ悲観的である。なぜなら個々人の行動の環境変化に及

ぼす影響が、あまりにも迂遠であり、悪影響を及ぼしていることも、また、努力が好結果を及ぼすことも、感じることができないからだ。多くの人はエネルギー消費に罪悪感もなければ、削減の責任感も感じない。関心があるのは、経費の削減という経済的側面だけなのである。トランプ大統領のような利己主義者は、人類の理性の結晶ともいえるパリ協定に価値を見出さず、脱退して短期的な利益を上げることに意欲を燃やす。

そこへ爆弾を投じたのが、スウェーデンの十六歳の少女グレタ・トゥーンベリさんである。般若の形相をして「無責任な大人を許さない」と叫んだ姿に各方面からさまざまな反響があった。

日本語や英語で見るネット情報では、多くは、「病的だ、大人に利用されている、複雑な社会を知らない子供の理屈」など批判的なものが多い。彼女に不満の人のはけ口用のコールセンター（オーストラリアABCテレビ）

グレタ・トゥーンベリさんは現代の「ジャンヌ・ダルク」なのだ



まで登場する様だから、この世の中は真に情けない人たちばかりで溢れている。

カッサンドラーの予言

ここで思い出されるのは、ギリシャ神話のカッサンドラーである。アポローンに愛され、予言能力を授かった。しかし予言の力を授かった瞬間、アポローンの愛が冷めて自分を捨て去ってゆく未来が見えてしまったため、アポローンの愛を拒絶してしまう。憤慨したアポローンは、「カッサンドラーの予言を誰も信じないように」という呪いをかけてしまった。カッサンドラーは、パリスがヘレネーをさらってきた時も、トロイアの木馬をイリオス市民が市内に運び込もうとした時も、これらが破滅につながることを予言して抗議したが、誰も信じなかった。（ウイキペディアより）

米国や日本では、グレタさんはまさにカッサンドラーになっているように思う。しかし、川口マーン惠美氏が本誌七月号で紹介した緑の党の強いドイツはもとより、気温上昇に見舞われているヨーロッパ諸国では、高く評価されているのではないだろうか。楽天的なイタリアでも、彼女の発言をきっかけとして若者の間に環境保全の機運がにわかに盛り上がり、示威行動が盛んに行われるようになっているという。

筆者は、二十年も前、ジュネーブに赴任したばかりの時、オートショーでスイス運輸通信大臣が、「環境問題が本ショーのテーマだ」と挨拶するのを聞いて驚いた経験がある。当時の日本では、燃費の良さという考えはあったが、オートショーが環境問題を考える場だという発想は想像もしなかったからだ。

カッサンドラーからジャンヌ・ダルクへ

ことの本質を見極め、長期戦略を練ることが苦手な日本人は、直ちに直接、我が身に影響しない環境問題に対する意識が極めて低い。しかし、付和雷同が得意な日本人は、権威者や周囲が一定の方向に動き出すと見境もなく一斉に同方向へ動き出す。この性向は何も日本人に限ったものではなく、多くの人間に共通なものだろう。

今回はグレタさんのノーベル賞は叶わなかったが、もし受賞したならば世界中の人たちに地球環境維持の責任感に目覚めさせるきっかけとなると思う。人々の意識も、あっという間に変わり、カッサンドラーが一躍ジャンヌ・ダルクに変身することもあり得ると密かに願っているところである。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。ＩＥＥＥ名誉会員。